Don't　spell　magical　word

ゆりか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｏｎ'ｔ　ｓｐｅｌｌ　ｍａｇｉｃａｌ　ｗｏｒｄ

【Ｎコード】
Ｎ５０７６Ｍ

【作者名】
ゆりか

【あらすじ】
はるか昔、人は誰でも魔法が使えた時代があった。
そこで小さな王国の一人の王子が誕生した。名はワイアス。
彼は、この世界で唯一魔法が使えなかった。
次男のユージーンが生まれた日、彼は旅に出た。
魔法の力がこの世界での力。
彼はこの世界でどう生きたのだろう

プロローグ

ねえねえおばあちゃん？この石きれいね
…この石はね『不魔石』という石なんだよ。
ふーん。
この石はねぇ魔法を使えなくする効果があるんだよ。
魔法？おとぎ話に出てくる？
そうさ…昔はみんなが魔法を使えたのさ。
うそだぁ！
本当さ…
いつぐらい昔なの？
むかーしむかしさ…
じゃあなんで今は誰も使えないの？
それはね…あぁもう寝る時間だね…いい子におやすみ。
えー…そのお話聞きたいな。
いい子にしていたらいつか話すよ…さぁもう寝なさい。
はーい。おやすみなさい。
おやすみなさい

この話をしたら、世界中のみんなあなたをバカにするだろうね…こんな幼い子でさえも…
笑っちゃうくらいにバカな人…でも、ひとりくらいはこんなあなたのことわかってくれるかもしれないから
私書くよ…

旅立ち

「父上、あなたは素晴らしい王であり、父親です。母上、私はこの上ない愛情をあなたから注いで頂きました。…ですが、お別れです。お元気で。」
そうつぶやき、ワイアスは誰もいない玉座を後にした。
そして、城をでて、北へ向かい歩き出した。
しばらく歩き続けていると、
「本当にいいのですか？」
隣で一緒に歩いている、マーチが彼に聞いた。
「…もう決めたことだ。おまえはどうなんだ？ここでは、『呪われた血』の迫害はマシなほうだぞ。」
「もう決めたことですから…」
ワイアスはマーチの緑色の髪をちらりと見て、何か言おうとしたが言葉は続けなかった。
それから二人は黙って歩き出した。
もう城は見えない。
目標は『不魔石』を見つけ出すこと。
それはどんな魔法も打ち消してしまうという伝説の石。
どんなに困難があろうと絶対に見つけ出すとワイアスは心に決めている。
夜が明けてきた。
小さい時に冒険した時のドキドキは今はあまり感じられなかった。
むしろ焦燥感、罪悪感、不安感などのほうが多かった。
もうしばらく歩きつづけると町が見えてきた。
そして、マーチに言った。
「いよいよだな」
「はい」
マーチはニッコリそう答えながら、歩調が速くなっていく。

「おい、待てよ」
ワイアスはそう言いながら、わくわくしているマーチにかすかな不安を覚えた。
しかし、その不安をすぐ打消しその町へ入った。
その不安は見事に的中したのだが…
町に入るやいなや石がマーチに飛んできた。
それが、マーチの頭に命中しマーチの頭から血が滴り落ちた。
「わーい。俺の狙った石が命中したんだぞ。」
子供達が4，5人いる中の1人が、無邪気に笑って自慢していた。
小さな子供たちの最初の魔法の練習は石を魔力で動かすことから始まる。
石を魔力で飛ばして的に当てる遊びがいつの時代でも流行っている。
『呪われた血』はよく子供たちの的にされた。
ワイアスは怒りその子供の方に行こうとしたが、
マーチがそれを制止した。
「大丈夫ですから。こんなものすぐに治ります。」
そういって、マーチは呪文を唱え始めた。
すると、頭の傷がたちまちふさがった。
子供たちは悔しがってまた魔力で石をマーチの方に飛ばしてきた。
マーチはその石をすべて止め、逆に子供たちの方に飛ばした。
子供たちは石が自分達の方に来るあわてて逃げ出した。
「大丈夫。当たる直前で止まるようになっていますから。」
そうマーチは笑って見せたが、先ほどのわくわくはもう消えていた。
ここでも『呪われた血』の迫害は強そうだとワイアスは感じた。

手掛かり

「『不魔石』の情報はないか？」
酒場でワイアスは聞き込みを始めた。
しかし、ぞの名前も知る人はいなかった。
酒場を離れ、ほぼすべての住民に話を聞いたが、『不魔石』の情報は見つからなかった。
しかし、面白い情報もいくらかあった。
町の東の森で「伝説の石」について研究している老人がいるらしい。
早速、マーチを連れてそこへ向かった。
どれだけ森の中を歩いただろう…
まったく前進している気がしなかった。
同じところをひたすらグルグル周っているように感じた。
「ここでは、どうやら結界が張られているようです。」
マーチは、そう言って荷物からたいまつを取り出し静かに呪文を唱え始めた。
するとそのたいまつはある方向だけを照らし始めた。
「こっちです。」
マーチはそう言い、進みだした。
ワイアスはその後に続いた。
すると、一件の小屋が見えた。
その小屋はボロボロで年期も入っていたが、人が住んでいる感じはあった。
ワイアスはその小屋のベルを鳴らすと、一人の老人が出てきた。
その老人はマーチの緑色の髪を見るとこういった。
「なんじゃ？『呪われた血』が何の用じゃ？」
マーチはそれを聞くと、悲しそうに一歩下がった。
ワイアスはマーチの前に出て老人に向かって言った。
「…あなたは伝説の石について研究しているそうですね。『不魔石』

の在り処が知りたいのです。」
「…なんのために『不魔石』を探す？」
「…私は魔法が全く使えません。」
「フム…８０年生きてきたが、魔法が全く使えないものは初めてじゃ。かたや、『呪われた血』からはおびただしい程の魔力を感じる…まあ邪悪なものではないだろう。入りなさい。」
老人はそう言い、中へと二人を案内した。

過去

家の中にはおびただしい程の本、実験道具であふれかえっていた。
老人は唯一空いていた椅子に腰かけ、ワイアスに尋ねた。
「さて、なぜお前は魔法が使えない？」
「…わかりません。生まれた時からずっとそうでした。」
「フム…生まれた時からか…」
「両親はあらゆる手段を用いてなんとか私に魔法を身に着けさせようとしてくれました。私もそれに応えようと必死に努力したのですが…。」
「『不魔石』は触れたものの魔力を消し去る石…それに触れた人間は二度と魔力が使えなくなるという…不魔石で何がしたい？」
「…」
ワイアスは沈黙を続けた。
その時、ワイアスの脳裏に両親の顔が思い浮かんだ。
いつも優しかった父と母…魔法が使えないからと嘆いたりもしなかったし、怒りもしなかった。
いつも正しい人間であれと教わった。
ただ…次男のワイバーンが生まれた夜、彼に魔力があると分かり、両親が喜んだのが悲しかった。
当たり前のことだが、彼にはそれが悲しかった。
ワイアスは脳裏に浮かんだ思い出を消し去り言った。
「あなたにはその理由は言うつもりはありません。」
老人はワイアスの瞳をじっと見つめた。
そして、静かに言った。
「今日はもう遅い。泊まっていきなさい。」

雪降る町

ワイアスとマーチは雪原をひたすら歩いていた。
「ワイアス様…本当にこんなところに国なんて存在するのでしょうか？」
マーチは激しい寒さに泣きそうな声をだして言った。
「…残りの食糧も少ない。なければ死ぬかもしれないな…」
ワイアスはそう言いながら老人が言ったことを思い出していた。
あの老人によればこのあたりに国があるという。
その国は他国の侵略を防ぐために魔法では溶けない雪が1年中降り注ぐと言っていた。
実際この雪はマーチの魔法でも決して溶けなかった。この雪は溶けないばかりではない。どんな魔法も無効化した。もしここに国があったら『不魔石』もそこにあるかもしれない。
手足はすでに感覚はなく、凄い眠気に襲われていた。
意識がもうろうとする中、二人は吹雪の向こうに明かりがあることに気付いた。
「マーチ！明かりだ。きっとあそこに町があるんだ。あそこまでなんとか頑張るぞ。」
ワイアスは喜びながら言った。
マーチは寒さに震えながらうなずいた。
二人がこの町の門の奥を入ると春のような暖かい空気が二人を包んだ。
どうやらこの町には寒さが入らないような魔法が施してあるらしい。
町の人もみんな明るい人たちばかりだった。
だが、『不魔石』の情報は誰も知らなかった。
人々の話では、この国の王妃クーダは博識でこのようなことにも詳しいらしい…
気性も大変穏やかで、旅人なども快く歓迎してくれるそうだ。

そこで二人は王妃が住んでいる城へ行くことにした。

鏡

「鏡よ聞いておくれ…アリエッタは次期王妃にふさわしいのだろうか？」

『ふさわしいわけがありません。あの美貌に人々が騙されているだけでございます。』

「しかし、初めて会った時も彼女は気品もあり素晴らしい女性であったけれど…」

『それは外見だけでございます。あの女の心の中では嫉妬の炎が燃え上がっておりましたとも。なんせあの女は下賤の出でありますから』

「…私はそんなこと一度たりとも気にしたことはありませんよ。」

『それは違います王妃様…あなたは気にしておいでです。今までは我慢しておられたのです。ですが、今回は王妃になるお方。やはりそれなりの身分でなくてはなりません。』

「しかし…」

『私が今までに間違ったことをおっしゃいましたか？あの女が子を産み、下賤な血が流れることを許せるでしょうか？いいえあなたは許せないでしょう。後で一番後悔するのはあなたなのですよ！』

「…なぜそんなことを言うのです。身分の差別を無くそうといったのは他ならぬお前じゃない」

『あの時は素晴らしい王妃になりたいと願っていたじゃありませんか。実際にあなたは私の助言で国中から愛される王妃になりました。しかし、今回は国民の反感を買い、あなたも後悔します。私にはその未来が見えるのです。』

「…」

『いいですか…私の言うとおりにしなさい。あなたはあの女が憎いわけではない。これからすることは全て鏡である私があなたにやらせることなのですから』

謁見

「ようこそこんな辺境の国までおいでくださいました。この国に訪れる人はそう多くはいないのです。あなたたちの訪問を歓迎いたします。」
クーダ王妃は微笑みながら言った。
ワイアスはひざまずきながら言った。
「ありがとうございます。…私たちは『不魔石』を探しているのです。この国では魔法では溶けない雪を降らせています。だから、『不魔石』にも何か心当たりがあるのではないかと考えました。何か知っていることがあれば教えてはいただけないでしょうか？」
「…魔法を使えなくする石ですね…申し訳ありません『不魔石』のことは私にはわかりません。魔法では溶けない雪は昔からこの国で降っていたのです。」
「…そうですか。」
「しかし、何かこの国で手掛かりが見つかるかもしれません。宿を手配させます。ご自由にされるがよいでしょう。」
「ありがとうございます。」
謁見が終わった後、マーチがワイアスに話しかけた。
「評判通り素晴らしい王妃でしたね。」
「…そうだな。」
「どうかしました？」
「…どことなく思い詰めてらっしゃるようにも見えたんだがな。」
「確かに元気がないようにはみえましたが…体調がお悪いのでしょう」
二人が廊下を歩いていると、一人の緑色の髪の女性がおどおどしながらもマーチに話しかけてきた。
「少しよろしいでしょうか？」
「はい。なんでしょうか？」

「失礼ですが、王妃様はあなたを見て何か不快な感情は示されていたでしょうか？」
「いえ…それは私が『呪われた血』でいるからでしょう？しかし王妃は、その差別を軽くしようとしている第一人者と聞きました。実際私のようなものにも誠実な態度で接してくださいました。」
「そうですか…」
「失礼ですが、あなたも『呪われた血』ですよね？」
「…はい。…そして私は今、王子と現在婚約中なのです。申し遅れました。私はアリエッタと申します。」

狙撃

アリエッタの話によると、アリエッタは王子から求婚されたらしい。王子はかなり強引な人で、アリエッタが王子に求婚の回答をする前に王と王妃の前で宣言してしまったらしい。もちろん王やその他の重臣は皆大反対をした。王妃ただ一人を除いて…王妃はひたすら沈黙を守っていた。

その話の途中、アリエッタは涙ながらに言った。

「身寄りのない孤児だった私を城へ引き取ってくださったのは王妃です。それから王子の世話を任されるようになって…今まで王妃には本当によくして頂きました。僭越ながら母親のように慕っております。その王妃を困らせるのが…私には一番辛いのです。」

マーチはアリエッタ姫に尋ねた。

「あなたは王子のことをどう思っているのです?」

「多少強引なところもありますが、私が生涯愛する人は彼以外にはおりません。」

「…もし、あなたが彼を愛しているのなら、私は身を引くのが一番よいと思います。」

「…」

「この先、起こることは想像に難くありません。あなたは殺され、王子は失脚するでしょう。王妃もそれがわかっているのでしょう。あなたは、『呪われた血』なのですから。」

マーチの言葉に、アリエッタはうつむき、そして静かに呟いた。

「わかっては…わかってはいるのです。やはり、その運命には逃れられないと…」

その時、外から空気が切裂けるような音がした。ワイアスがそれに気づき、アリエッタを抱きそれを躱した。すると、音が壁にぶつかると壁は何かに切り刻まれたようにズタズタになった。

これが、呪文だと分かり、ワイアスはマーチの方を見た。
マーチは直ちに念じ始めた。
呪文はアリエッタに向かっていくつも飛んできた。
アリエッタを抱いたまま、ワイアスは次々と躱していった。一つ、二つ、三つ…
マーチが目を開くと青い光が3人を包み、全ての呪文を外に弾いた。
さらにマーチは呪文唱え始めた。
すると、すべての壁が半透明になり中がすべて見えるようになった。
そおして後姿ではあるが、黒いローブを着て逃げている男を発見した。
呪文がやむとワイアスはアリエッタに言った。
「王子の発言であなたはもう狙われています。
まずは、王子の元へ向かいましょう…。」

決断

王子の部屋に向かうと、王子もまた、こちらへ歩いて来た。
アリエッタは小走りで王子の方へ走った。
その後ろ姿だけで王子のことがどれだけ好きかがわかる気がした。
王子はアリエッタにかすかに微笑み、そして次にワイアスらの方へ視線を移した。
「こちらの方々は？」
王子はアリエッタに尋ねた。
「今しがた私の命を助けていただいたのです。」
王子はそれを聞くと表情が変わった。
「命を…それはどういうことだ！」
「…私が『呪われた血』だからでしょう。」
アリエッタは悲しそうにうつむいた。
そこへマーチが口を挟んだ。
「当然のことでしょう。『呪われた血』とはそれほど忌み憎まれているのです。」
王子がマーチの髪に視線を移した。
「あなたも…」
「はい。『呪われた血』です。魔法でも決して隠すことはできません。あなたは人々の考えを甘く見たのです。王妃がいかに『呪われた血』を擁護しようとも、それほど人の偏見を変えることは難しいのです。」
王子はうなだれ黙った。
ワイアスは王子とアリエッタに尋ねた。
「あなたたちはこれからどうするのですか？」
王子はアリエッタを見つめた。
アリエッタは黙ったまま俯いていた。
「アリエッタと結婚する意志は変わりません。しかし、命を狙われ

た今となってはアリエッタの周りには信用できるものは少ないです。」
ワイアスは腕を組みながら言った。
「それならば、私たちがアリエッタ様を守りましょう。マーチは同じ『呪われた血』ですし信頼もおける者です。王子が私たちを信用されればですが…」
「…ありがとうございます。」
王子は頭を深々と下げた。
一方、アリエッタはワイアスの方を見て、こう言った。
「本当にありがとうございます。しかし、私は王子と結婚する気はございません。」

護衛

マーチは宿の廊下で先ほどの出来事を思い返していた。
王子は結婚を断ったアリエッタを説得し続けたが、彼女は頑として首を縦に振らなかった。
「あなたのことは愛しています。…でも、私たちは一緒にはなれませんね。」
王子もこのアリエッタの涙ながらの言葉を聞き、とうとう口を閉ざした。
城の中は危険なので、王子はアリエッタにも宿を手配した。
そして、マーチとワイアスに護衛を改めて頼んだ。
アリエッタは最初護衛を断っていたが、王子は結婚をしない条件と引き換えにそれを承知させた。
「私はまだ彼女との結婚をあきらめていません。まずは皆を説得しなければ。」
王子はそう言って王の元へ向かってった。
マーチは自分の緑色の髪を見ていた。
この髪のせいであきらめなければいけなかったことがどれほどあったろう…
アリエッタは愛する人に愛していると言われている。
それは人生で最高の言葉なのに、彼女にとってその言葉は…
マーチはそのことを考えると胸が痛んだ。

夜中、ワイアスが護衛を交代するために部屋から出てきた。
「ワイアス様…」
マーチがそう話しかけると、ワイアスが言った。
「俺たちが彼女たちのためにできることは護衛以外にはないよ。だからもう悩むな。お前が結婚に反対したことも後悔することはないんだ。」

マーチはそれを聞くと、いっそう肩を落とし部屋へ戻っていった。

そのあとしばらくして、足音がワイアスの元に近づいてきた。
ワイアスは目を凝らすが、足音だけがだんだんと近づいてきた。
「マーチ！！」
ワイアスが大声をだした。
そして、マーチが部屋から飛び出てきたのと同時に足音の場所から人が出てきた。
「驚かしてしまいましたね。」
そう言って姿を現した人物は王妃クーダだった。

選択

アリエッタが部屋から出てきて、驚いて尋ねた。
「王妃様！おひとりでここまで来られたのですか？」
王妃は無邪気な笑顔で言った。
「ええ。最近、姿を消せるローブを手に入れたのでお試しがてらね。」
「なんと危険な…国民のほとんどはあなたをお慕い申し上げておりますが、中にはあなた様のことを快く思っていない人もいます。一人で出歩くなどの行為は以後謹んでください！」
「はい…。ところで、私は堂々と諌めてくれるあなたのそういうところが好きなのです。」
「そんな…もったいないお言葉です。…ここに来られた理由はわかります。王妃様には申し訳の立たぬことをしでかしてしまいました。」
「しでかしたのは、王子ですよ。それに私は王子のしたことを誇りに思っているのです。息子は身分を超えてあなたへの愛を貫こうとした。あなたには振られてしまったようですけどね。」
「…なぜそれを？」
「あら？私だってあなたと同じ女性ですよ。あなたが考えることぐらいお見通しですよ。」
「…」
「私はあなたの選択はあなたにとって幸せだと思っています。あなたが王子と結婚すれば嫉妬と憎しみは全てあなたに向けられるでしょう。…私はあなたのような人たちには普通の幸せを与えたかった。誰にも邪魔されることなく自由に生き、笑いあい…王子と結婚したら、そんなことは夢のまた夢。」
「…はい。王子のご好意は大変ありがたいのです…が…」
アリエッタの目から涙があふれ、言葉はそれ以上続けられなかった。

王妃はアリエッタの肩を抱き静かに話した。
「…それほど王子のことを好きなのですね。想うと涙がでるほどに…」
アリエッタが落ち着くと、王妃は静かに立ち上がり帰ろうとした。
別れ際に王妃は言った。
「アリエッタ…今日ここに来たのはこのことを言っておこうと思ったのです。あなたがどういう決断をしようと私はあなたを応援すると…どの道を選ぼうと責めません。好きな道を歩みなさい。ワイアス様、マーチ様！彼女をよろしくお願いします。」
そう言い残して、王妃は去って行った。
少ししてアリエッタは呟いた。
「また…お一人で帰ってしまわれたわ。」

決別

王妃は自分の部屋に戻りベッドの上に座った。
そして、部屋の禍々しい鏡を見つめて言った。
「やはり彼女は素晴らしい女性だったわ。それに、王子のことを愛してくれている。」
『そうですか…あなたの好きにしなさい…しかし、あなたは必ず後悔するでしょう。』
「…」
『そうだ…あなたに一つ教えておくことがあります。』
「いえ結構です。…私はあなたに話しかけるのはもうやめようと思います。」
『なぜ？私はあなたを『国中からうらやましがられる王妃』にしたじゃありませんか。』
「はい。私は元は本当にダメな王妃でした。でも、私はもう一人でやっていけます。」
『…わかりました。しかし、あなたは悲しみの淵に立たされて、また私を呼ぶでしょう。』
「…さよなら。」

暗殺

王子は部屋の中にいた。
さっきまで王子は周囲を辛抱強く周囲を説得していた。
結果は散々だったが…
違うんだ…彼女じゃないとダメなんだ…
アリエッタは城の使用人として働いていた。
小さい頃からずっと同じ時を過ごしてきた。
昔は今と比べてもっと差別がひどかったが、母はアリエッタと遊ぶことを咎めなかった。
恋に落ちた瞬間はずっと心に残っている。
5年前、アリエッタの誕生日の時、いつも世話になっているからとドレスを作らせて送った時だ。
「もったいなくて私には着られません。でも…ありがとうございます。」
アリエッタは申し訳なさそうにしてたっけ。
それでも嬉しそうにしていた表情がとても可愛くて…
それからずっと好きだった。
彼女が自分のことを好きじゃなくても構わなかった。
絶対今より幸せにしてみせる…そう思ってプロポーズしたのに…
まさか命を狙われるなんて…

その時、扉からノックの音がした。
王子は扉を開いた…
見知らぬ男が扉の前に立っていた。
見知らぬ男はナイフを王子の胸に突き立てた。
王子は何が起こっているのかわからないままその場に倒れた。
失われていく意識の中で王子はアリエッタのことを想った

夢

「アリエッタ様！起きてらっしゃいますか？」
「…ああ、はい。」
「今日は王子との結婚式ですよ。ボーっとしていたら困ります。…ところで本当にこのドレスでいいのですか？」
「もちろん！なぜ？」
「…その…すてきなドレスですが、少し結婚式にはそぐわない気がして。」
「これはね…王子が私に下さったドレスなのです。もったいなくて着れなかったのだけど…今日どうしてもこれを着たかったのです。」
「そういうことですか…さしでがましいこと言って申し訳ありません。」
「アリエッタ！」
「王妃様！」
「王妃だなんて…今日から私はあなたの娘になるのだからね。今日からは母と呼んでくださいな。」
「…この日が迎えられるなんて私は幸せ者です。お母様、ありがとうございました。」
「言ったはずですよ。私はあなたを応援すると。そろそろ息子が来るはずよ。準備はいいかしら？」
「アリエッタ！」
「王子」
「王子はもうやめてくれよ。君は今日から私の妻だろう？ほら、そのドレスはやっぱり君に似合っているよ。やっと着てくれた。」
「母親としてはウエディング用のドレスを着てほしかったけどね。一生で一度なのに本当にこのドレスでいいの？」
「母様！その件ではアリエッタとは十分に話しただろう！！もう口を出さないでくれよ。」

「はーい。」
「アリエッタ。じゃあ私は先に行っているよ。」
「はい。」
「…ありがとう」
「何がですか？…王子！」

アリエッタはハッと目を覚ました。
夢か…
私は今日城へ行き、求婚をみんなの前で断る…これでいい
こんな私のことを好きでいてくれた。私にはこれだけでいい

アリエッタが外へ出ると、ワイアスとマーチがいた。
「昨夜は護衛本当にありがとうございました。」
アリエッタは深々と頭を下げた。
「アリエッタ…王子が昨夜亡くなったそうだ。」

別れ

ワイアス、マーチ、アリエッタはすぐに城へ向かった。
しかし、城の門番にすぐ止められた。
マーチが門番を魔法で眠らし、先を急ぐと次々と魔法使いたちが現れた。
「少々手こずりそうです。2人は先を急いでください。」
そう言ってマーチは魔法を唱えた。
すると、ワイアス、アリエッタ以外の人々の動きがピタリと止まった。
2人は階段を上がり王子の部屋の前まで行った。
部屋の前では人が大勢集まっていた。
「アリエッタだ！捕えろ！！」
大勢の中の1人がそう叫んだ。
しかし、すぐに王妃の声が響いた。
「待ちなさい！この人たちに手を出してはいけません。命令です。」
「しかし…」
「私はこの国の王妃です。その私がそのように言っているのです。」
「はっ、はい。」
身分の高そうな兵は渋々引き下がった。
「アリエッタ…こっちまで来てください。…私の息子を最後に見てやってください。」
そう言って王妃は、毛布をそっと取った。その手は震えていた。
アリエッタは足を震わせながら王子の前へ行った。
王子の死に顔を見ると、ポカンと無表情になった。
「眠っているみたいでしょう…」
王妃はボソッと言った。
アリエッタは腰が砕け、その場にしゃがみ込んだ。
そして、王子に向かって話しかけた。

「あなたに言いたかったことがあったんです…『結婚はしません。』って。
あなたには幸せに生きていって欲しかったから。私がいない方がいいと思ったから。
…あなたのことを誰よりも愛しているから。」
その時、隣にいる王が叫んだ。
「お前のせいだ！！お前が王子を…息子を殺したんだ。おい！直ちにこの女を捕えろ！」
「待って下さい！！」
王妃が言ったが、王は叫んだ。
「黙れ！捕えろ！！直ちに死刑を執行する。」
兵の魔法使いが周りを取り囲んだ。
ワイアスは取り囲まれたアリエッタの前に立ち剣を抜いた。
その時、後ろから魔法が飛んで来た。それがワイアスに当たった。
ワイアスはそれが当たると人とは思えないような駿足で兵や魔法使いを薙ぎ倒していった。
魔法を次々と躱して、ほぼ全てのものを倒すとアリエッタを抱き疾風の如く走り去り、消えた。

呪い

ワイアス、マーチ、アリエッタは町はずれの茂みに隠れていた。

「マーチ、俺に掛けてくれた魔法でなんとか逃げ出すことができたよ。」

ワイアスがそう言うとマーチはニコリと笑った。

アリエッタはまだボー然としていた。

ワイアスが彼女に話しかけた

「アリエッタ…君はこれからどうするつもりだい？」

「…まだ、何も考えていません。」

そう言いながら、アリエッタは空を見上て言った。

「…私が何か悪いことをしたのでしょうか？私が王子を殺したのでしょうか？私が『呪われた血』だからなのだけでしょう？『呪われた血』だからというならばいっそすべてを呪いましょうか？愛する人すら奪われて…それならいっそ…」

ふらふらとアリエッタは町の真中へ歩き出した。

そこへ、兵や魔法使いたちの大群が姿を現した。

アリエッタはその大群を見て、言った。

「呪われろ」

一人が急に苦しみだした。

「呪われろ、呪われろ…」

アリエッタがその言葉を言うと次々と人が倒れていく。

「呪われろ呪

われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ」

大群はたちまち全員苦しみだした。

アリエッタはやめない。

呪われろ呪わ

れろ呪われろ」

ワイアスやアーチはその様子を黙ってみていた。
そして彼女もまた非常に魔法力の強い魔女であることを知った。
大群が依然として苦しんでいる中、一人の女性だけその場で立っている女性がいた。
それは、王妃だった。
王妃はアリエッタの前に立ち言った。
「もうやめなさい。」
王妃はそう言ってアリエッタを抱きしめた。
アリエッタは肩を震わせて口を閉ざし大粒の涙を流し泣き始めた。
「あなたに見せたいものがあるのです。」
アリエッタを抱きしめながら王妃はそう呟いた。

息子の死

王子が死んだ直後、王妃は息子が殺されたとは思えない程、葬儀の準備をテキパキと指示した。
そして、膨大な仕事量をこなし、部屋へ戻ってきた。
まだ息子が死んだ実感が湧かない。
疲労のため、王妃はすぐに寝てしまった。
特に夢にうなされることもなかった。
朝いつものように目覚め、朝食に向かった。
豪華な食事用のテーブルには王子の分の料理も用意されていた。
「いつもの癖で息子の分まで用意していますよ。」
王妃は笑顔でそういった。
しかし、家政婦はそう言わせたことを申し訳ないと思ったのか凄く恐縮して謝罪した。
王は黙って料理を食べていた。
ああ、これからはこの人とずっと2人なのか・・・
もう息子の笑顔も泣き顔も照れた顔も怒った顔も見れないのか・・・
そんなことを考えながら王妃は食事を食べた。
王妃は再び部屋へ戻った。
葬儀までは少し時間があった。
生きていれば、今日もまた私を説得しに来たのだろう。
息子は自分がやりたいことを素直に言わない所があった。
よく見れば協調性があり、悪く見れば自主性がない。
そんな息子が素晴らしい王になれるだろうか・・・王妃はずっと不安だった。
しかし、周りの反対を押し切って結婚を通そうとする姿に王妃は安心していた。
息子ならば素晴らしい王になれるし、アリエッタと共に幸せになってくれると。

いつも息子はあと１０分ぐらいしたらこの部屋に来た。
王に反対するよう迫られていたため、ずっと王妃も反対を続けていた。
王子の決意がどれだけ強いかも見たかった。
今日はもう許そうと思っていた。「私はあなたを達二人を応援します」と言ってやりたかった。
言う前に死んでしまった・・・
不意に、心に穴が空き、風がそこから吹き抜けているように感じた。
どうにかそれを抑えようとしたが、どうしようもなかった。
息子はもういない
どうしようもないその事実を悟った瞬間、虚無感、悲しみが一気に襲ってきた。
王妃はその場で泣き崩れた。
しかし、泣いても泣いても心にあいた穴はどうしようもなく王妃を悲しい気持ちにさせた。
その時、鏡から声がした。
『ほらほらね。今、後悔してるでしょう？私の言うことを聞かなかったからですよ。あの時、アリエッタを始末してれば王子は殺されずにすんだのに・・・』
「どーすればよいのです？悲しくて哀しくて堪らないのです。ああ・・・どーすれば・・・」
『・・・その悲しみは私にはどうしようもありません。それが愛する人の死なのですから。しかし、王子が再び幸せになれる方法なら私には分かりますよ。』
「・・・どーすればよいのです？」
「まず、アリエッタを私の前に連れて来なさい。そうすれば方法を教えましょう。」

林檎

アリエッタ達は王妃と共に王妃の部屋に向かった。
「この鏡の前に立ってみて下さい。」
王妃はそうアリエッタに告げると、アリエッタは頷き鏡の前にたった。
すると鏡はアリエッタに話しかけた。
『あなたは王子にまた逢いたいですか？』
「…あの人を失って気づいたんです。私がどれだけ王子を必要としているのかを…例え何を犠牲にしてもあの人に逢いたいです。」
『…分かりました。王妃、あなたに以前渡した林檎は王子に食べさせましたか？』
「はい。それは確かに食べさせました。あの林檎は何だったのですか？」
『あれは来世の林檎といいます。あれを食べたら、同じくそれを食べた人と来世で再開できると言うものです。ただし、後から食べた者は先に食べた者に会うまで永久に眠り続けることになります。…この林檎は王子が食べた林檎と同じ木でなった林檎です。これを食べたら王子の生まれ変わりと再会できます。』
「本当ですか！？」
『ただし、生まれ変わりが人間になっているかは分かりませんよ。それは馬かもしれないし、カエルかもしれません』
「それでも…また再び会える可能性があるのなら…私にそれを食べさせて下さい。」

眠り姫

来世まで待つ…アリエッタのその答えに、ワイアスとマーチは猛反対した。
―今は悲しくても、その内にまたいい人に出会えるよ。―
―王子は君にそんなことは望んでいない。―
―この鏡が本当のことを言っているのかわからない。―
などなど、本当に必死に二人は説得していた。
彼らはまた彼女の幸せを願っていたからだ。
しかし、彼女はどんな説得にも応じなかった。
2人の説得を黙って聞いていた王妃が口を開いた。
「以前私はあなたに、『どんな答えでも応援する』と言いました。でも、私は結局何も分かっていなかった。一番大切であるはずの息子の幸せを願わずに、私の幸せを願ってしまった。…大好きなあなたと結婚して二人で仲良く暮らす、そんな夢を見てしまった。…だから今度は、今度だけは息子のことだけを考えた一人の母親として、あなたにお願いします。どうぞこの林檎を食べてください。まっすぐにあなただけを愛した息子に応えてやって下さい。」
アリエッタは王妃の涙交じりの声に対して言った。
「王妃様…私逃げていました。王子の想いから…王子が死んでから気づくなんて…ワイアス様、マーチ様、私は今の想いを忘れてずっと生きていたくはないのです。王子の望みなんて関係ないのです。鏡の言っていることが例え万分の1の可能性しかなくてもそれを信じたい。そしていつか王子に会えたら言いたいことがあるのです。」
そう最後に言って彼女は林檎を食べ、深い眠りについた。

眠りの後に

アリエッタが深い眠りについてから王妃は鏡に話しかけた。

「結局あなたは事実のみを私に語っていてくれていたのですね…」

『もちろん。私は真実の鏡なのですから。…しかし私はあなたに一つ嘘をつきました。』

「…なんですか？」

『アリエッタは王子にふさわしくないと嘘をつきました。しかし、それはあなたにこの結婚を辞めさせたかったのです。…結局あなたを説得することはできませんでしたが。』

「…そうでしたか。しかし、あなたには色々なことを教えて頂きました。」

『…最後にアリエッタに与えた林檎は私からアリエッタへのせめてもの贈り物です。髪の毛以外は全て若いあなたにそっくりなのですから。』

「…」

『あなたが私に話しかけることはもう一生ないでしょう。しかし、最後にあの二人に会わせてはくれませんか？』

「…そうですね。あの若者たちにはあなたの知恵が必要でしょう。今すぐに呼んできましょう」

――

――――――――――

一方、眠りについたアリエッタがどうなったのかは誰も知らない。

ただ、童話などで彼女のことらしき話はいくつか残っている。

もしかしたら

貧富

ワイアスとマーチはさらに北を目指していた。
王妃の部屋に会った真実の鏡の話では北に答えがあるという…
北へ行くために十分な準備をしていたので目的の町には割合苦しくなく行くことができた。
町に入ると、きらびやかな街並みが一面に広がっていた。
歩く人々も上品な人々ばかりだった。
まず、二人は宿を探すことにした。
持ち合わせとしては十二分に持っているが、
今後も長い旅が予想されるのでできるだけ安い宿を探すことにした。
そこで、通行人にマーチが聞いた。
しかし、通行人はマーチのことをまるで汚いものでも見るかのように一瞥し無視した。
そこで、ワイアスもなるべく優しそうな通行人に話しかけた。
が、ワイアスもまた同じく無視された。
二人して首をかしげていると一人の少年が近づいてきて言った。
「お兄さんお兄さん！あなたたちじゃ人に話しかけることはできないよ。」
マーチは聞き返した。
「どうしてです？」
「それはタダでは教えられないなぁー。」
そう言いながら少年は誰にも見られないようにこっそり右手をだした。
マーチは渋々お金を渡した。
すると少年は素早くお金を取り、また右手をだした。
「これだけじゃあなー。あと５０はくれないと」
マーチは少し考え何かを呟いた。
そして、かなりの額のお金を少年に手渡した。

「こ…こんなに！？す・すっげー。ありがとう！情報サービスするよ。」
「この町の安い宿を探しているんだけど？」
「ここから東に４ブロックほど行けば、タダ同然に泊まらせてくれる場所があるよ！
でも身の安全の保障はないけどね。安全に泊まりたいなら多少高くてもこの辺り宿に泊まるといいよ。」
「通行人の人が話しかけても無視されるのはなぜだい？」
「それはあんたたちが身分書を持っていないからだよ。みんなが胸につけてるだろ。」
「それはどこで手に入れればいいの？」
「ここから２ブロックほど西へいけば売っているよ。かなりのお金がないととてもじゃないけど手が出ないけどね。でも、それを持っていればここではかなり住みやすくなるはずだよ。逆にこれを買えない貧乏人にとっちゃここは最低な場所なんだよ」

盗賊

「ここだな…さっきの少年が言っていたのは。」
2人は少年の言うとおり、4ブロックほど東に進んだ。
先ほどの煌びやかな建物とは違い、薄暗くボロボロの長屋が至る所に立ち並んでいた。
道端には死骸などが転がっていて生臭いにおいが辺りを包んでいた。
その中で、2人は宿屋を見つけた。
外装は長屋の中でもかなりマシなほうだったが、部屋は今にも天井が落ちてきそうな部屋だった。
その夜、外から気配を感じてワイアスは目を覚ました。
なにやら囁くような声がしていた。
ワイアスはマーチを起こした。
そして、マーチは呪文を唱え始めた。
すると、壁が透き通って向こう側が見えた。
そこには、さっき会った少年が5、6人を引き連れてこちらを襲う準備をしていた。
ワイアスとマーチはため息をつき、窓から宿の外へ飛び降りた。
そしてマーチがその部屋に向かって呪文を唱えた。
少し時間が経ち少年たちは部屋に突入した。
すると少年たちは金縛りにあい、誰一人動けなくなった。
ワイアスとマーチは部屋の前まで戻り、ドアの前に立った。
少年たちが口ぐちに悪態をつくので、マーチの呪文で少年以外は黙らせた。
少年は悔しそうに言った。
「ちきしょう。騙しやがったな。さっきもらったあのお金がいつの間にか消えてたぞ。」
「一番最初に渡したお金は本物だよ。こちらにもあまり持ち合わせがないもんでね。だからといって盗賊まがいの行為をするのはダメ

だろ。」
「しょうがないだろ！ここではそうやってしか生きる道はないんだ。お金持ちになるしかこの町では生きては行けないんだ！」
よく見ると、少年以外の仲間もみんな子供ばっかりだった。
マーチはため息をつき、魔法を解き、少年たちに言った。
「今回は許してやる。しかし、もう2度と盗賊なんてするな。自分たちの境遇がどんなもんだって、人を傷つけるのはダメだ。」
少年はワイアスとマーチをしばらく見つめた。
そして、突然地に頭をつけて涙ながらに言った。
「…お願いです。助けて下さい。」

策略

少年の名前はショーン。
生まれてから3年で、一人で暮らすことになる。
親はショーンを産んでから逃げた。
この国では一つの決まりがある。
下級階層の親は子供を産んで3年育てたら、この国を出ることができる。ただし、その子供は置いて…
下級階層の労働力を減らさないために、この国の富裕層が考えた政策だ。
自分たちは一生楽になるような仕組み作りには余念がなかった。
ほとんどの親は子供がいるために、この国から出られずに一生を迎える。
ショーンのような親は、国を出るために子供を産む。
ショーンのように3歳でも1人で生きていけるようにこの国には強制収容所がいくつもあった。
そこなら、一応暮らすことは可能だ。（1日中休みなく働き、手にするのは1日分の食料分のみの給料だが）
ショーンは8歳までそこで働き、盗賊稼業に身を落とすことになる。
それは生まれつき頭がよかったこと、魔法力が人並み外れていたためで、なんとか生き延びることはできた。
6年後、盗賊の首領の右腕となっていた。
しかし、最近首領が捕えられてしまった。
そこで、ショーンは死刑に前に首領を救出する作戦を考えていた。
だが、どうしても資金と駒が足りない。
今ここにいるマーチという名の魔法使いの魔法の凄さまじかった。
この魔法使いの力を借りる事ができれば、首領も救出することが、可能だろう。
どんな嘘をついても、この男の協力を取り付けなければいけない。

ショーンは地面に頭を擦り付けながらこう考えていた。

承諾

ショーンはマーチとワイアスが協力しそうな話を2人に説明した。
2人にはショーンの兄が無実の罪で捕まり、それを助けるためにどうしてもお金がいるのでこのような犯行に及んでしまった。
どうか兄を助ける手伝いをして欲しい。と。
2人は黙ってそれを聞いていたが、やがてマーチはショーンに言った。
「これからお前の部下に魔法をかける。それから今と同じ話を私たちにしなさい。あなたが、嘘をついたらその部下は帰らぬ人となるでしょう。」
そして、マーチはショーンの部下に魔法をかけた。
部下は光に包まれた。
ショーンはマーチが人を殺すような残忍な性格には思えなかったのでハッタリの可能性が高いと思った。
しかし、万一の可能性を考えて泣く泣くショーンはマーチに真実を語った。
そして真実を聞いたマーチはショーンに尋ねた。
「君たちは一度でも人を殺したことがあるかい？」
「ないです。俺たちは盗賊さ。盗賊は盗みしかしない。暴力も最低限さ。それが掟だ！」
「…」
「頭は俺たちみたいなのを人間として扱ってくれた最初の人だ。ここにいるのは皆親に捨てられた孤児ばかりさ。頼むよ！礼なら必ずするから。」
「…わかったよ。協力しよう。」
了解したマーチにワイアスが言った。
「正気か！？この国でお尋ね者になるぞ！」
「この子供たちの頭に会ってみたくなったんです。ご心配なく…見

つかるような真似はしませんから」

トワイライト

「明日が処刑か…」
トワイライトは獄中で呟いた。
何もできなかった。
お金のないものにとってはこの町は地獄…
この地獄で希望がどこから湧いてくるのかわからないが確かにこの男にはあった。
生まれつき魔法力が強く、頭の回転も人並み外れていた。
ショーンという優秀な右腕も手に入れた。
これからという時に足元をすくわれた…裏切りによって
この国で生まれた国民は一生この国で過ごさなくてはいけない。（子供を産んだ母親は例外だが）
いつか抜け出してやろうと思っていた。
自分だけじゃなく下級層全員で…そして自分たちの国をつくろうと志していた。
そこには生まれで…お金のあるなしで決まるんじゃない…自分たちの実力次第でどんなことでもやれる国にしたかった。
「何もできなかったな…」
そう呟いたとき、目の前にマーチが目の前に現れた。
そしてマーチはトワイライトに質問した。
「お前は何がしたい？」
「俺は…自分たちの国が作りたい。自由な…自由な国が作りたい！」
マーチは呪文をかけて檻のカギを外そうとしたが、呪文封じがかかっていて外れない。
「…無駄さ…それで外れるようだったら俺がやってる。この国で最強の魔道士が作った鍵さ。」
「わかった。」
マーチはそう呟くとさらに深く念じた。すると爆音が鳴り響き、鍵

が破壊された。
「お前…いったい…そんなことより爆音で魔法使いたちがくるぞ！」
「ショーンたちが周りの者たちを眠らせている。急いで逃げるぞ！」
そして二人はこの檻から脱走した。

勧誘

「本当にありがとうございました！」
トワイライトらはマーチに深々と頭を下げた。
「いや、いいよ。この国は何か…何かおかしいような気がするから…」
ショーンが続けて土下座した。
「お願いします。俺たちを助けてください！」
「やめろ！ショーン！」
「この人さえいれば、僕らは自由になれるかもしれないんですよ！」
「欲しいものは、自分たちで手に入れるもんだろ！」
「…」
「マーチさん…ありがとうございました。このご恩は一生忘れません！」
トワイライトらは去って行った。
マーチがワイアスに呟いた。
「なんか…いいやつらでしたね…」
「そーだな…頑張ってほしいよな。」
「まあ、でも僕らには探すものがありますからね。」
「とりあえず、認定証を買いに行きましょうか。」

富裕層の地区へ行き、認定証を購入した。マーチは買えなかったが…それからというもの周りの人の見る目が変わり全ての人が暖かく接してくれた。
そして、この地区の立派な図書館へ行き、ワイアスは『不魔石』にまつわる文献を探し回った。
マーチは認定証を持っていなかったので、外で待っていた。
ワイアスを待つ中、一人でいるマーチは人目を大きく引いた。
富裕層の不良たちが魔法で石を飛ばしてきた。

マーチはため息をつき、石を跳ね返そうとしたが、それは自動的に跳ね返った。
横を見ると、ショーンが横にいた。
ショーンはマーチに言った。
「見てください。この国は腐っています。敢えて貧富の差をつけて自分たちの自尊心を満足させるんです。私たちは違います。あなたが『呪われた血』だからといって決して差別しません。私たちはそんな国を作りたいのです。どうか力を貸してください。」
「…」
「すぐに答えが欲しいとは言いません…もし…もし僕らに力を貸してくれるというなら、また、最初あった場所に来てください。」
マーチは少し考え、答えた。
「君たちが…いや君が俺を必要としているのは俺の魔法力が強いからだよね？」
「…」
「トワイライトはそーゆーことが嫌なんじゃないかな…」
「…あなたに何がわかるんですか！？」
「あの人は潔癖すぎるんですよ！だから、すぐ人に裏切られて…だから俺が俺が汚い手を使ってでもあの人を…」
「…」
「とにかく…待ってますから。」
ショーンは去って行った。

ノメッドからの紹介状

ワイアスは続けて情報収集を行っていた。
そして、この国について様々なことが分かった。
まず、この国では『呪われた血』の迫害が強いこと。
２つ目にこの国で実権を握っているのはこの国で最強の魔道士であるノメッドであること。
最後に、トワイライトたちはこの国でも有名な盗賊団で、富裕層にしか盗賊をしないし人殺しもしないので極貧層からはかなりの支持を得ているということ。
結局、この国の内情はわかったが、『不魔石』のありかはわからなかった。
図書館を出て、マーチと合流した。
マーチはどこか変な様子で黙っていることが多かった。
宿へ戻ろうと３ブロックほど戻ろうとしたとき、突然大量の魔法弾が飛んで来た。
ワイアスは一方の魔法弾を剣で切り裂き、後は全てよけた。
マーチは杖を地面にさして、念じた。
すると、すべての魔法弾が一瞬にして消えてしまった。
二人が身構えていると、一人の魔術師が突然出現した。
その魔術師はマーチの呪文を目の前にして驚いていたが、やがてこう答えた。
「このような芸当ができるものはこの国ではノメッド様くらいだ…突然の襲撃の無礼を謝罪したい。私はノメッド様の使いのものです。あなたがたがトワイライトらを脱走させたのはもうわかっております。是非あなたがたを城にお招きしたいのですがいかがでしょうか？」
「断る。」
ワイアスは即座に答えた。

その魔術師は不気味な笑顔を浮かべて言った。
「おやおや、困りましたなぁ…ノメッド様はあなた方のお探しになっているものの情報をすでに掴んでおいでですがねぇ。」
マーチはそれを聞くと、ワイアスに耳打ちした。
「ワイアス様…どうやって知ったか知らないですけど、『不魔石』のことについて何か知っているかもしれませんよ。」
「うん。そーだなー…ちょうど手掛かりがなくなって八方ふさがりなのは事実だ。用心しながら相手のことを探っていこうか。」
2人はノメッドの招きを受け入れることにした。

マジックスポット

ワイアスとマーチは城の玉座の前まで来た。
座っている男は、こちらを見て言った。
「初めまして。私はノメッドといいます。私の牢屋の魔術を解いたのはあなたですか？」
「いえ、隣にいるマーチです。」
ノメッドはマーチを汚いものでも見るように、一瞥した。
「やはり…『呪われた血』ですか…残念です。あなただったら、私の側近にとりたてようと思いましたのに。」
ワイアスはため息をついて言った。
「『不魔石』の情報を教えて頂けると聞きましたが？」
「魔力が集まる場所『マジックスポット』をご存知ですか？」
「ええ…聞いたことがあります。マジックスポットには強い魔力を持つ石や木、宝石などがあり、その物を加工して、手に入れた武具は特別な魔力を秘められた者として術者に凄い力を与えるとか。」
「この『嘆きの指輪』がそれにあたると言われています。」
ノメッドは指輪を見せた。
マーチはそこに凄い魔力を感じた。
「さて…ここからが相談です。わが国では代々言い伝えられているマジックスポットの場所が一つ存在します。そこへ、あなた方に赴いて欲しいのです。そこから特別強い魔力が秘められている物を取ってきて欲しいのです。」
「なぜ…それを私たちに？」
「そこには常人では近づけないような罠や、魔物がいます。なので、強い魔力を持ったものでないと駄目なのです。今まで兵たちを何回も送りましたが、一人として帰ってきませんでした。」
「それを私たちに行けと？」
「あなた方が『不魔石』が欲しいといったのじゃありませんか？そ

こには『不魔石』が一つぐらい転がっていても不思議じゃないでしょう？」
「…」
「まあ、無理にとは言いません。当然マジックスポットから取って来たものは全て私の物となるのですから。」
「私たちがもしそれを持ち逃げしたら？」
「その時は、国を挙げて全力をもってしてあなた方を殺します。」
「…『不魔石』は？」
「ご自由に持って行かれるがよいでしょう！魔法が使えなくなる石に何の価値があるというのです！？」
「…わかりました。」
「商談成立ですね。今夜は泊まっていきなさい。出発は明日の朝案内させますから。」

少年時代

ちょうどワイアスとマーチがマジックスポットに出発している頃、
トワイライト達はクーデターの準備を進めていた。
―とうとうこの時が来たのか―
トワイライトはしみじみと感じた。
トワイライトは少年時代のある日を思い浮かべた。

その日は雪が降っていた。
トワイライトはボロボロの靴、一枚の布きれを羽織りマッチを売っていた。
マッチはいりませんか？
立ち止まる人は当然のように誰もいなかった。
これを…これを売らなければ、あの場所には戻れない…
偽善でもいい…同情でも…憐みでもいい…どうかどうかマッチを買って下さい。
…もう声すらでない。
トワイライトは住宅の隙間に座り込んだ。
あの場所には…自分を兄のように慕ってくれる子供たちがいる。
なんとか、なんとかこのマッチを売らなければ…
残りわずかな気力を振り絞り、トワイライトは再び街中へ行った。

３時間後…

もう…立ち上がる気力すらない…このまま…このまま死んでいくのかそう思いかけた時、地面に光るものを見つけた。
最後の気力を振り絞った。金貨だ！！
トワイライトは地面を這いつくばって移動した。

そして、その金貨を拾い上げた。
これで、これであの場所へ戻れる。
あの場所へ戻って…あいつらに会える…
しかし、同時にある考えが浮かんだ。
戻って…戻って一体何になる！この金貨も全て取られて、明日には同じ状況だ。
死ぬのが2，3日延びるだけじゃないか…
このままじゃ…このままじゃ死ねない。
ここで野たれ死にしても、誰も何も思わない…
絶対にそんなの許さない…
トワイライトは目には生きる意志、心には友を捨てる罪悪感を抱えた。
こうしてトワイライトは施設を抜け出して盗賊稼業に身を落とすこととなった。

今でもこうしてあの日を思い出す。
こうして思い出すことが自分の野心を燃やすこと、友たちの祈りになると信じて

死の亡霊

「ここか…マジックスポットは…」
ワイアスが呟いた。
マジックスポットは本当に意外な場所に存在した。
それは、城の地下だった。
地下には一つの扉があり、その前には魔術師が護衛していた。
案内人は魔術師と何やら話していた。
話し終わると、魔術師は道を開けた。
扉を開け、階段を下りる。
どんどん空気が重苦しくなっている。
まるで、何かがおぶさっているような気さえ感じた。
案内人は言った。
「私はこれ以上行くことはできません。どうか御無事で。」
そう言って案内人は去って行った。
さらに階段を下りて行った。
すると、何やら広い場所についた。
マーチは呪文を唱え辺りを明るくした。
周りを見渡すと、そこらじゅうに骸骨が転がっていた。
二人はその骸骨を踏まないように先に進んだ。
さらに奥深くに進んでいくと、不気味な光が一つ、また一つとつき始めた。
それを光で照らすと、鎧を着た骸骨たちが不気味な光を放っていた。
全部で3体の骸骨が目にも止まらぬスピードで襲ってきた。
まず、1体目の骸骨が剣でワイアスを突き刺してきた。
ワイアスはそれを間一髪でかわし、その剣を取ろうとした。
すかさず、2体目の骸骨が斧を振り下ろした。
ワイアスは間一髪で剣を離し、腕の切断は免れた。
しかし、最後の骸骨の鉄拳は躱すことができず、額で受けた。

額からは血が噴き出て、ワイアスの意識はもうろうとしたがかろうじて立っていた。
マーチはその間ずっと呪文を詠唱していた。
そして、その呪文の詠唱が終わると、手が光はじめ、その光をワイアスに当てた。
ワイアスは防戦一方だったが、その光を受けるとスピードが格段に上がり敵の攻撃を余裕を持ってかわし始めた。
そして、地面に落ちていた剣で3体の骸骨と対等に戦い始めた。
マーチはまたも呪文の詠唱を始めた。
ワイアスはまず、斧を持っている骸骨の手首を両断した。
そして、剣をふるった骸骨の振り下ろしを返し太刀で受け、その反動を利用して真後ろにいる骸骨を一刀両断した。
マーチの呪文の詠唱が終わり、両手を挙げた。
すると、まばゆい光が辺りを照らして、骸骨たちは見る見るうちに動かなくなった。
ワイアスとマーチは骸骨が動かなくなるのを確認すると、安堵して言った。
「ふう、終わったな…」
「かなり強い骸骨でしたね…」
二人はさらに奥深くへと進んで行った。

鳥の死骸

さらに奥に進むと、人の骸骨がなくなってきた。
それとは反対に辺りは禍々しい魔力が濃くなってきて二人の気分もだいぶ悪くなってきた。
「ワイアス様…周りから魔力がわき出てくるのを感じます。」
「ああ…中心に行くほど強くなってくるな…」
二人は慎重に進んだ。
しばらく進むと、道の真ん中に子供の死骸が転がっていた。
その死骸からは禍々しさは微塵も感じられなかった。
むしろ、何かを守っているような神聖さすら感じた。
しかし、死骸の手からはおびただしい魔力を放っていた。
その手は両手で何かを覆っていた。
ワイアスは慎重にその手を動かした。
すると、鳥の死骸が苦しんだ表情のまま固まっていた。
その鳥からは強烈な死臭と魔力を放っており、これがノメッドの求めていたものであるのは一目でわかった。
二人はこの死骸を持っていくのをためらった。
ノメッドに渡すと嫌な予感がする…本能的に二人はそう感じ取っていた。
いったんこの死骸のことを考えるのはやめて、『不魔石』の捜索を二人は始めた。
『不魔石』を見つけられないまでも、何か手掛かりがないかと思い捜索を始めた。
しかし、『不魔石』どころか魔力が帯びた石の一つさえここにはなかった。
二人は相談し、手ぶらで帰ることで合意しようとしていた。
すると、ワイアスがその死体の手からあるものを見つけた。
その手には神聖な魔力を放ったブレスレットがはめられていた。

マーチはそのブレスレットをよく見てみた。
すると、ブレスレットには何か文字が描かれていた。
「ワイアス様…このブレスレットどうします…？」
「いや…このままにしておこう。もしかしたら、この人の大切なものなのかもしれない…」
「ちょっと…おしいかもしれないですけどね。」
「まあ、しょうがないさ…死体から奪うわけにもいかないしな。」
二人は帰ろうとその死骸を離れると、突然その死骸が動き始めた。
二人は即座に身構えたが、その死骸からは殺意を感じなかった。
死骸はマーチの元に近づき、ブレスレットをしている手を差し出した。
「…ブレスレットくれるのかい？」
そう聞くと死骸はコクリと頷いた。
マーチは手から優しくブレスレットをとり、自分の手にはめた。
「ありがとう。」
マーチがそう言うと、死骸はニコリと笑っているような表情をしたように見えた。
そして、ブレスレットをはめた手に先ほどの禍々しい鳥の死体も乗せた。
「…これも持っていけばいいのかい？」
そうマーチが聞くと、その死骸はコクリと頷き、その場に倒れてそのまま動かなくなった。

帰還

ワイアスとマーチは城の地下から帰ってきた。
地下の扉を出た後、その扉の前に魔術師が待ち構えており、言った。
「お帰りなさいませ。早速ノメッド様の前に来てください。」
そう言って、二人をノメッドの元へ案内した。
ノメッドはマーチの手の上にある死骸を見ると言った。
「ご苦労様でした。さあ、そのものを私に渡しなさい。」
「『不魔石』は結局見つからなかったよ。」
「…そうですか。それは、残念ですね…しかし、私には関係のないことです。さあ、それを私に献上しなさい。」
マーチは渋々その死骸をノメッドに渡した。
「では…ごきげんよう。そうだ！今日は城に止まってお行きなさい。『呪われた血』にも部屋を用意しましょう。」
二人は泊まる当てもなかったので、素直にその申し出を受けた。
二人が退出した後、ノメッドは部下を呼び言った。
「今日の夜、あの二人を殺しなさい。」

マーチとワイアスは用意された部屋へ行き話した。
「結局、ブレスレットは取られませんでしたね。」
「あの死骸が目当てだったみたいだからな…どうでもよかったんだろ。」
二人が寝ていると、外から気配がした。
二人は身構えた。
マーチは呪文を唱えて、壁を半透明にした。
すると、扉の前で無数の魔術師が待ち構えていた。
マーチは呪文を唱え始めた。
しかし、唱え終わる前に魔術師たちはバタバタと倒れ始めた。
魔術師たちの後ろに、トワイライトがいた。

トワイライトは扉を開け、部屋に入った。
そして、ワイアスとマーチに言った。
「今、あなたたちは殺されるところでした。これで借りは返しました。」
「トワイライトはこんなところで何を？」
「…それは、あなたたちには関係のないことです。早くこの国を出られるとよいでしょう。」
そう言ってトワイライトは去って行った。

ノメッド

ノメッドは置かれたその死骸を眺めながら言った。
「とうとう見つけた…」
ノメッドは早速部下を呼び、鍛冶屋に加工させるように言った。
ノメッドは自分の指輪を見つめた。
ノメッドは自分より強い魔法使いがいることを認めなかった。
自分の父親ですら自分より実力が上であることを妬み、呪った。
しかし、どうしても父親を超えることはできなかった。
なぜなら父親にはこの指輪があったからだ。
父親は常日頃から言っていた。
「城の地下のマジックスポットにはこの指輪を超えるものがある。
それは、強大な魔力を秘めていたがとうとう取ることができなかった。」
ノメッドはそれを知った時、何人もの魔法使いを派遣してそれを取に行かしたが全て帰らぬ人となった。
父親が死に、指輪が手に入った。
指輪をはめた時に魔力が奥底から湧き出てくるのを感じた。
王になったその日、ノメッドは魔術大会を開き、いとも簡単に強者を倒して優勝した。
力を見せることで臣下は従い、何事も好き勝手に行うことができた。
下級層には一層の差別を行い、自分を超えるかもしれない能力がありそうな子供は容赦なく下級層に落とした。
しかし、自分の魔法が初めて破られたことを知った。
指輪を相続してから、自分の魔法を破る魔法使いは存在しなかった。
その事実を知った時、城の地下の物に再び興味が湧いた。
それを手に入れれば再び最強の魔法使いとなれる。
そして、ノメッドにある考えが浮かんだ。
自分の魔法を破ったものにそれを取らせればいい。

そこで、そいつが死のうとも、はたまた帰還することができてもいい。
見事にその魔法使いは帰還したが、もうどうでもいい。
この死骸が手に入れられたなら、自分がまた最強の魔法使いなのだから…

ノメッド（2）

2日後…
ノメッドの前に鍛冶屋が現れた。
鍛冶屋はノメッドに死骸を加工した首飾りを渡した。
「ご苦労様です…あなたには何か褒美を与えねばなりませんね…」
ノメッドはそう言って、金貨を一生お金に困らないだけ渡した。
鍛冶屋は嬉しそうに去って行った。
早速、ノメッドはその首飾りを首に掛けた。
とたんにとてつもない魔力が力の奥底から湧いてきた。
「フム…悪くない…」
ノメッドはある呪文を唱えた。
すると、ワイアスとマーチの二人が宿でくつろいでいる姿が見えた。
「丸見えだ…」
そう言って、部下を呼びワイアスとマーチの元へ刺客として派遣した。
また、ノメッドは同じ呪文を唱えた。
そこにはトワイライトと部下たちの姿がノメッドの頭に映し出された。
「フム…これは面白い…」
そう言ってノメッドはさっきと同じように部下を呼んだ。
しかし、少し考え部下には何も命令しなかった。
「何をやるのかを見てみるのも一興か…全てが通用しないと分かった顔が見ものだな。」

一方、鍛冶屋のトカはそのお金をもって想いにふけっていた。
――これさえあれば、これさえあれば……――
トカはもともと下級階層にいた。

鍛冶屋としての腕を買われて富裕層の仲間入りを果たした。
美人で優しい嫁を貰い、何不自由ない暮らしをしていた。
ある日、娘が病気になった。
その病気はかなりの重症で、この国では医療魔術師が3人しかいなかった。
医療魔術師の診断だと持って3週間だということだった。
医療魔術師の魔術治療の順番は金、いかに金が払えるかということだった。
「お願いです。2か月なんて…娘が、娘が死んでしまう…」
「申し訳ない。この国の法律に逆らえば私が死刑になってしまう…」
所詮一介の鍛冶屋であるトカは全財産を絞り出しても2か月後が限界だった。
途方に暮れていたころにノメッドからの依頼があった。
トカはこれにすがるしかないと思った。
全ての不安を打消し、一心不乱に作業を行った。
3回に1回しか成功しないと言われたが、見事に首飾りを作成した。
今トカの目には涙が浮かんでいる。
――この金さえあれば娘を救えられる……――
城を出た矢先、突然心臓が苦しくなった。
門番は苦しんでいるトカを見て、駆けつけた。
「だ、大丈夫ですか？」
「…こ、これを娘に…」
トカが倒れる最後の光景はその門番の心配している姿だった。
――この門番にすべてを任せるしかないのか――
死を悟ったトカが抱いた気持ちは娘への愛だった。

洗脳

トワイライト達はこの数日間ずっと城の偵察をしていた。
その間、マーチとワイアスが襲われかけていたので助けた。
偵察の甲斐があって、城の見取り図はほぼ完成した。
部下のショーンはマーチとワイアスも仲間に入れようと断固主張した。
トワイライトもその意見に非常に興味を持った。
2人がノメッドの襲撃を受けたことで、利害が一致するからである。
トワイライトは人の善意を信用しない。
マーチがトワイライトを救出した時からと言ってマーチを信用したわけではなかった。
だが、今回は利害が一致する。
そういう相手は信用ができる…信頼はできないが。
それがこの国で生き残ってきたトワイライトの考えだ。
トワイライトは早速部下を派遣してマーチとワイアスとの接触を図ろうと派遣した。

3人のトワイライトの部下が手分けしてワイアスとマーチを探すことにした。
1人目の部下は宿に戻っていないかと思い宿に向かった。
2人目の部下は西のスラム街に潜んでいるのじゃないかと考えてそこを重点的に探した。
3人目の部下は図書館にいっているのではないかと思い、図書館付近を捜索した。

2日後
3人のトワイライトの部下は気がついたらノメッドの目の前にいた。

ノメッドは笑いながら言った。
「申し訳ありませんね。あの2人と組まれたら少々厄介なことになりそうだったのでねぇ…あなたがたと会わすわけにはいきませんねぇ。」
1人の部下は悔しそうに言った。
「くそっ！！これから俺たちをどうするつもりだ…」
「ちょっと待ちなさい…今どれが面白いプランか決めているところなんですから。」
ノメッドは3分ほど考えて言った。
「1つ目の案は今ここで3人が殺し合いをする…強者は許してあげましょう。私は強いものが好きですから…」
ノメッドは続けて話した。
「2つ目の案は3人を洗脳してスパイとして送り返す。トワイライトの愕然とした顔が目に浮かびます…」
「3つ目の案は…面倒なのでここで殺してしまう…さて、どれがいいでしょうかねぇ…」
1人目の部下が挑発するように言った。
「俺たちは洗脳されるほど精神が弱くはないんだよ！！どっかの誰かさんとは違ってな！！」
その言葉をノメッドが聞くと、笑いながら言った。
「いいでしょう。やってみてごらんなさい。」
そうノメッドは言って、呪文を念じ始めた。
呪文を掛けられている間、1人目の部下は考えていた。
――この呪文さえ耐えれば、トワイライトの元へ戻れる。以前トワイライトに聞いたことがある。洗脳の呪文は完ぺきではない。精神力が本当に強いものは耐えられる。ここで耐えなきゃ何のために生きてきたかわからない。耐えろ耐

えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ——

呪文の詠唱が終わった時、１人目の部下はこう思った。

——よし！ 耐えきった。耐えきったぞ！！ ノメッド様の言った通りだ…精神力が強かったら耐えられるんだ。これで…これでトワイライトの元へ戻れる。すべてはノメッド様のために——

刺客

ワイアスとマーチの二人は西の路地裏を走っていた。
城の部屋で襲われてからというもの、刺客が途切れることはなかった。
二人はそれを蹴散らして場所を転々とした。
しかし、移動した先ですぐにまた刺客に襲われるのでキリがなかった。
「なんで向こうには俺らの行き先がわかってしまうんだろう？」
「…もしかして…」
マーチは呪文を唱え始めた。
すると、自分たちの周りが灰色に光り始めた。
「な、なんだこれは？」
「トレイスの呪文です。相手の動向が逐一頭の中で動いています。」
「なんとかできないのか？」
「一回この呪文を掛けてしまえば、中々難しいですね。しかし…こんな上級呪文を長時間続けられる魔術師がいるなんて…」
「…もしかしたらあの死骸の効果かもな…」
「トレイスの呪文をトワイライト達にも掛けられていたら勝ち目はないですね…」
「何か手はないのか？」
「…今のところは何もありません。」
「もしかしたら、トワイライト達は困って俺たちと接触したがってるかもしれない…お互い困った状況だ。もしかしたら協力し合えるかもしれない…」
「そうですね…任せてください。」
マーチはまた、呪文を唱え始めた。
すると、マーチの頭の中でトワイライト達が城の中にいるのが見えた。

「いけない！！もう城の中に侵入している！！このままでは、ノメッドの思うつぼだ。」
「俺たちも急ごう！！」
「ちょっと待って下さい…その前に…」
マーチはさらに呪文を唱えた。
すると、２人の灰色の光は消えてなくなり、青白い光に変わった。
「はあ…はあ…トレイスを解いてガードの呪文を掛けました。これでもうこちらの居場所がわかることはないでしょう…ただ、今のでかなりの魔力を消耗しました。…ノメッドと戦うとき、後々響いてくるかもしれません…」
「その時はその時だ…今はトワイライト達の元へ急ごう！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5076m/

Don't　spell　magical　word

2010年11月3日01時28分発行